

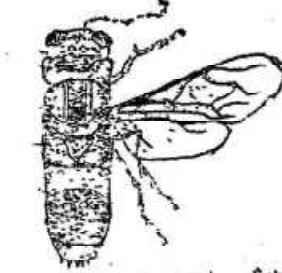
Vol. 1, No. 8

1951年8月
倉敷昆虫同好会

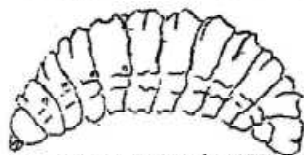
イラガに寄生する イラガイツツバセイボウ について 追悼特集号 近藤光宏

最初にこの蜂について僕の観察したところを簡単に述べてみると、蜂は櫻の木などに最も多くいるイラガの繭中の幼虫に寄生している。そうしてイラガより半月ばかり後で羽化する。5月の下旬頃蛹化し、6月2.3日の間に蜂となって正体を現わした。イラガイツツバセイボウ (*Chrysis* (*Bentachrysis*)

shanghaiensis SMITHはナミコガネの翻翅の光澤に似て金緑色の非常に美しい蜂である。大きさは丁度クロバエぐらいの大きさであり、又少々の数蜂にはかなりの抵抗力をもっていた。と云うのは戸棚の中に蜂が羽化する頃、ホルマリン液を綿にしゆましておった。だから僕達が戸棚をあけると非常に目に苦痛を感じたにもが、わらずこの蜂は



イラガイツツバセイボウの成虫



イラガイツツバセイボウの終齢幼虫



イラガの繭

た。そして61箇にイラガの幼虫が居た。あと4箇は両種の死骸らしかった。最初あまり寄生しているものが多いようなので、この寄生率は90%ぐらいに達するかも知れないと思っていたがこれで見ると39%である。これはもつと数多くの個体を調べたとき、よりばつぱりとわかるであらうし場所又は年によって多少異なるのでしょう。(調査地 岡山県立倉敷老松高等学校校庭)

* 羽化してから、しかも何も食べずに数日たつても死ななかつた。

次に蜂はイラガにどのくらいの割合で寄生しているかを調べてみるためにイラガの幼虫、即ちまるい繭を百個採つて来た。そしてそれを割つて調べて見た結果は次の如くである。

イラガイツツバセイボウの幼虫がその中35箇に寄生しているのが見られた。



カメムシの雑交

1951年7月24日、筆者は伯耆大山の山道で雑交、歩行中のカメムシを目撃、捕獲したのでお知らせします。ハサミツノカメムシ(*Acanthosoma labiduroides* TAKOVIČ, 1880)♀、セアカツノカメムシ(*Acanthosoma denticauda* TAKOVIČ, 1880)♂でした。(友野長一)

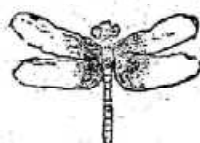
ウラギンスギヒョウモンの *Gynandromorph*

7月のはじめ頃、東町にお住いの森田先生が来られ、この蝶を飼って人れるようにと頼まれた見ると箱の中にきれいに展翅したウラギンスギヒョウモン *Argynnis Ladice japonica* MENT. KIES が3個体入っていた。いずれもラベルがなかったがこれは鶴田中学2年生、永野弘道君が鶴田町附近の渓谷から捕獲されたものであった。早速飼って見ると1つは完全な♀、もう1つは完全な♂であったが、あと1つは

左側の翅が♀、右側の翅が♂で完全な雌雄モザイク型(1つの個体に雌雄両性の特徴がまざって現われるもの)であり羽は又、大型であった。これは珍らしいので大原農業研究所の深谷常次博士にお見せしたところ、それに間違いはないとのことであり示した。蝶類ではこの例はあまり報告されておりませんが、本蝶の例は珍らしいのでこゝにお知らせしておきます。(小野 耕)

ハツチヨウトンボの記録 第1号

去る8月4日天候に恵まれ、今日こそは新地へとばかり自転車をとばした。左様に自転車を預け、すぐ長山の山に登り、しばらくして山を下り木村山に行くこと。ハツチヨウトンボを心に置いて小さな薪の木にそうて足を理んだ。何分初めてであるからだいぶ迷った。そうして目的地に来る間約2kmほど山を越え池に出、それを23回経過してやうと大きな池に出たとき見てみれば目的地の下であつた(岡山県倉敷市瀬戸町八代)。さてこの山の登りがけてある谷の頭れずたいに薪の木をよけながら20分ばかり登った所にふしとくなり大きな池が2.5ある上を水がきよきよと流れている。日光はよくあたっているが水があるので暑さガシのがれた。



少し休んでから船の横のじわじわした所の草の上を見ていると赤色の非常に小さなトンボが弱々しく飛んでいるのに気がついた。急いでそのトンボを捕ったが4個体ほどしか目につかずその外3個体を手にして歸った。なをその後、8月8日小野氏青野氏とハツチヨウトンボを採りに行ったが前と同じ場所で、わずか2個体を手にしただけであるから、このトンボの発生地はかなり局部的である。又この場所を新産地として紹介しておきます。(昭和26年8月4日14時頃) (近藤光宏)

テングチヨウの一異状型について

筆者が昨年10月22日病者村黒田に於て得たテングチヨウ♀の1個体は水田のような内地産の本種の本型とは異つた顯著な斑紋を有するもの



(43) 3

で明らかなる異状型であると思われる。すなわち前翅表に於ける大橙赤色紋の下に一小橙赤色紋を認め後翅表

に於ても斑紋状の大橙赤色紋の上に前翅表と同様の一小橙赤色紋を認む。普通採らるるテングチヨウに於てはこの一小橙赤色紋を表わす所が他の黒色部と同様黒色に於ておられるのが普通である。なおその他同じく昨年の10月27日やはり同所に於て得た本種の一雌体にこの個体と同様の部分にマ、不明瞭なる一小橙色紋を有するのを認めた。当地方に於いては注意してみれば案外相当数産するのかもしれないと思うので同好会諸氏の標本箱の本種をもう一度検するようお願いする。(廣瀬義雄) (1951. 8. 10)

★ ニュース ★

◎ 深谷昌次博士の御榮転

本会の爲に永い間お世話下さいました本会顧問の深谷昌次農学博士は現在までの倉敷市の大原農芸研究所昆虫室から東京の農林省病理昆虫部昆虫科の方へ御転任になることに成ります。8月5日大原農芸研究所長西門英一農博士はじめ研究所の人々、家族の方、同好会の人等など関係者大勢に見送られて倉敷駅16時30分の発行で上京されました。

◎ 築面蝨の會創立、昆虫同好会これと統合

今回、財団法人築面學園が昆虫博物館を建設されるに当り、この

4 (44)

事業の1つとして昆虫会の会を創立し早々に活動を始めることになった。なほ以前から大阪にあって活版屋を経営して来た昆虫科学を出していた昆虫同好会は、久に全面的に協力することになり、一刻もはや大坂市の昆虫の発展を期する為に向き合ふことを決定した。くわしく知りたい方は下記へ御連絡下さい。

大阪府豊能郡箕面町千尾川向 財団法人箕面学園内 箕面虫の会
なを昆虫同好会本部は 大阪府豊能郡箕面町千尾 505 の9へ移転
会長は西川義二郎と改名された。

◎ 白神 昭氏不慮の死去

本会の重要な中核の一人としてつくっていた白神昭氏は、去る7月31日午後4時10分頃、高梁川古地のあたりで流れの環道にはまりに機席障にて突然亡くなりました。まだわづか16才という若さで将来を約束されていた昆虫学徒で、突然の死去は学界の痛にも、本会にとっても惜しみて余りあることで、ここに記して一同哀悼の意を表します。戒名は照道晃輝居士、墓所は倉敷市日吉。

別れの四重唱

青野孝昭

白神昭氏と友野君及私の三人が古地の高梁川川原に降り立ったのは7月3日午後2時頃でした。その日の朝かねての約束通り小野洋君を現えた私達四人は「ボビエラ」混声合唱曲集を手に觀形山へ登ったのです。午前10時頃でしたが白神君のお宅は山麓にあるので友野君が呼びに行きました。白神君は昨夜、夜間採集で夜更けに採集品の整理をされたためでしょう。今更けたのだと元気に朝食もとらないで出て来ました。白神君は何時も朗らかな本物に氣持のよい人で、例の如く軽いつづねを云ったりしながら藤棚の下あたりの岩に四人腰掛け私達は楽しく四重唱を続けたのです。本当に愉快でした。その日の午後半の光もよだつような不祥が白神君に襲いか、とうとう誰が想像

お茶たでしょう。そうです。私達はそこで2時間ばかりも心ゆくばかり歌いに歌ったのです。正午頃、急に上流より氷塊で休みました。その時誰が云い出したかは思い出せませんが高梁川へ氷塊に行こうと云うことになつてしまつたのです。本当に何故あの時休まずに通ぐべきではなかつたかとあとがみを引かれる思いです。約束通り午前一時半頃、白神忍と小野君が私の喉に誘ひに来ました。小野君は野球の放送を聞くため来なかつたのです。私達三人は白紙車で焼けつくような炎天の中を今年最初の氷塊だと云うのでほり切つてカワラハンメウの居る古地越行つたのでした。三人共このあたりの流れ具合を知らず本当に無謀なことをしたものと後で悔まれておりません、巾広い川原の西側に巾の狭い瀬があり私達はそこで泳ぐことに決めたのです。瀬は非常に危険だということを知らなかつたのです。ですから不幸が起る前途は大変愉快に2時間位も瀬の狭いところを下つたり上つたり、氷塊昆虫の幼虫を調べたり、又歌も歌つたりして全く童心に帰つていたのでした。4時10分頃でしたか川中も然かつたし歩いて渡れる所があるということで私達は向う岸に

ちことを感じたのであった。同時に敵とは今後戦われることの堅い味方として認識することになるであらうことを必然的に感じたのであるが、事実その戦役との実在関係は素晴らしい速度で進展して行つたのであった。

それから3日間私は山へ野へと、その途間の岩壁にある目にしみる緑の一片にも、又山道のかたわらに咲く菜の花の一片にも明るい緑の息吹を感じて行つた。おそらくノッとして苦しい悲しい息吹は強じていゝのであらう。一作舞のことであつたか、2人で五くに奈良に行つて羽鳥山に於てオオミドリシジミを見つけた。その時私が2合完全なものを採つたが彼はノッとも採れなかつた。くやしそうな顔をして水を眺めていたが、その日はそのまゝ歸つた。レザレ彼はその夕方から、又翌日の朝、夕方、2、3日続けて行つたらしく、オオミドリシジミは勿論、ミズイロオナガシジミ、ウチナミアカシジミまで完全なやつをもつてにこにこしてやつて来た。全くすべてこの頃から驚くべき熱心さだつた。



深谷先生からの第1報

謹んで暑中御見舞申し上げます

私こと財団法人大原農業研究所在職中は一方ならぬ飼育熱を賜りましたが、この年端ハケ年振りで東京に戻り農林省農業技術研究所に勤務致すこと、相成りました。日頃の御文趣に対し厚く御礼申し上げると共に今後の相敬等を願つて止みません。

先は取方欠ず御挨拶申し上げます。

(お見送り有難う存じました。東京も毎日の暑さで奮闘)口しています。同好会諸君に似しく。

一九五一年七月

東京都北区西ヶ原町
農林省農業技術研究所
病理昆虫部昆虫科

深谷昌次

いつも彼はにこにこして餌を採るに頭腦の鋭さを示していた。彼も最初は採だけやつていたようであつたが、や

がて私は同じ路をたどつて口からほとんどの昆虫へと拡張していった。しかしやはり彼はあまり好きになつた蝶で、それを採つてゐるのを見ることは、甚だ少なかつた。虫類は鳥類を Coleoptera と Lepidoptera にきめたらしく、それを熱心に採集して、つついていた。それを殆どガミキリ科を愛好し

8(48)

ていたらしいが、ハナノミとかアカハネ、ホタル、ウレカとかいた存在ものに又大飽饌味を満ちていた。この前大山からホソカミヤリ、ホソリンゴカミヤリなど採つてきてひどく喜んで、いたそが目に写るようだ。又ば又仙遊一時やっていたように郵便切手の蒐集も行なっていたらしい。切手の不況にはよくその姿を認め、時にはソフトボール、テニス等スポーツに楽しんで居たことも記憶に残っている。時の推移につれて彼の昆虫学への熱は益々高まって行き、幾連せる疎集技術とすぐれた研究態度を示すようになって来た。一昨年、昨年合衆の天瑞屋元店で開かれた、倉敷市立児童科学博物館見学会に見事な標本を出品して市長賞、天瑞屋賞をそれぞれ授けられているし、又一昨年「倉敷附近の蝶」と題して研究発表をされたのも同じだが(虎野氏と共同研究)、度に立派なものであった。今年の始めのことであるが、嵯峨からともなく合衆に昆虫同好会創立の相談がもたらされた時、彼はとても喜んですごい意気込みでその荒足に努力した。そのかいあって立派な同好会を作ることに出来たが、又それ以後も彼の本会に対する貢献は寧ろもう一歩進んだもので、本会の編集に経路に努力していた。本誌「すずもし」の命名の時、彼も読者の一人であったように記憶している。彼の本会への投稿数は毎号他の人々のそれを圧した。度に本会の至宝であり傾ぐべからざる存在であったのだ。それ故彼の死が本会並びに会員一人一人にあたえた影響が精神的にも現実的にも如何に大きかったか想像に難くないであらう。もとより本会に限らず支障のない彼の死は学友の級友にも、又合衆圏にも、その他あらゆるところに対して悲痛な打撃を與えたのである。

彼の印象は全く明朗な人柄で、まことに純真そのもので、清愛な匂いのする虫歌な人柄であつたし、私の子だともてる、あらゆることにも開放感として理解者であつた。そして又昆虫のことを語るのは心から楽しそうであつた。彼は

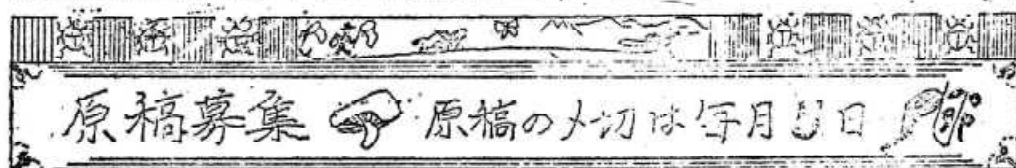


音楽が好きで、よくコンサートに姿を認め、昨年の夏のことだったか、船の歌でレコードコンサートを開いて一掃に盛況だったこともあつた。合唱をやり始めてからは、彼と奇野氏、友野氏、それから私とで下等ながらよく四重唱をやつた。福山でも何山でも金山でも、それから伯耆大山の山の奥でも……。いつか彼が最も得意なパートを、それに対して私がいつかパスをやつたのだが四人共よく歌が合つてすうり

次第に歌うのだった。あの日の朝から昼過ぎまでおぼろ人は鷗砂山に登つて
泥鰌をとばしながら採集した後、いつせのようになつてゐるのだがなぜか
あの日、あの時不思議なほどによく合つて、楽しい和音があたりの石の緑
の中に響けこんで行き、高く頭上に響き渡る音空にはてしなく拡がって行
つて、この大自然に調和し、いつもおぼろの夕がけ日はおぼろの伴奏をしてく
れたのだった。思えばおれが最後の本音となつてし、おれが彼の姿を見たのは
1時半頃のそれが最後であつた。その日の午後からおれを除いて3人は湖岸の
河原にカワラハシミツウを採るのが主目的で、楽しく出かけたのであつたが
……。噫、それが、それが……それから数時間後におのうな惨事になつたと
は誰しも夢にだにしなかつたことであらう。彼の殺害を防ぎながら、おれも
凍んでゐる私の前に青野氏が彼の死を傳えて来た時私はそれを全く信じるこ
とが出来なかつたし、又信じようとは思ひなかつた。翌日伊藤氏に参列した
時、彼の遺影を見て、或は彼の集めた標本を眺めた時、あの河原の混雑での
こと、鷗砂山のヒュウチでナンヤンムシにやられたこと、大川に行つた時木
をたいて呪われたこと等様々な思い出が先鳥煙を見ていちが如くに、くま
くま回つてその時採集した1マ1マの標本の上に幻と見えて現れ出て来ず
悪いものがこみあげてくるのを抑へることが出来なかつた。

実に彼の死は惜みても余りある事であり、まだまだこれからというところ
で、若冠16才の彼は将来を展望され、約束された又とない昆虫学徒であつた。
またおれのように、のつた人材を私達の附近にせよめめることはほとんど
不可能で、おれもおれも天の恵をきくおれも……父の家にダイバを探すが如く、
或は日本でフトオアゲハを求むるが如くであらう。おれも同好会員は彼の熱心
と覚悟を模範とし、又これを使つて、今は遠く思ふ彼方から眺めることし
が出来なくなつたおれと一語に立派な業績をあげて行くことを誓ひなければなら
ない、これが彼の望をなくさぬ唯一のせめである。

彼の標本は鳥取県立高松に寄附されることになつたらしいが、世に帯にあ
るが如く、それをもつてカビを養つたり、カツオグシムシ、ヒヨウホンムシ
の食餌として用へ、おたら前自の珍虫、奇虫を見る影もない状態にすること
のないよう、これに対する恒久的の措置なる管理を同族に切望して止まない。
終に現在までに彼が寄附した著作論文をあげておく。



白神昭君と関係著作論文目録

1. アサギマシラ すずむし Vol.1, No.1, P3 (1951)
2. セグロツノカサバネのカタツムリ すずむし Vol.1, No.1, P4-5 (1951)
3. ヒラタツバネのカタツムリ すずむし Vol.1, No.1, P5 (1951)
4. ヒメカサバネのカタツムリ すずむし Vol.1, No.2, P2 (1951)
5. シラホシカサバネのカタツムリ すずむし Vol.1, No.3, P4 (1951)
6. 大井のカタツムリ すずむし Vol.1, No.3, P5 (1951)
7. ウチヤンシジミのカタツムリ すずむし Vol.1, No.4, P3 (1951)
8. クロウバメシジミのカタツムリ すずむし Vol.1, No.4, P4 (1951)
9. 金糸のカタツムリに就いて すずむし Vol.1, No.4, P5 (1951)
10. シルウイアシシジミのカタツムリ すずむし Vol.1, No.5, P4 (1951)
11. アカカサハのカタツムリ すずむし Vol.1, No.5, P4-5 (1951)
12. アサマイナモンダのカタツムリ すずむし Vol.1, No.5, P5 (1951)
13. アラメヒゲイトビシジミのカタツムリ すずむし Vol.1, No.5, P5 (1951)
14. マツノカサバネのカタツムリ すずむし Vol.1, No.5, P5 (1951)
15. ねずみいとねずみ すずむし Vol.1, No.5, P6 (1951)
16. カンアオイを食べる幼虫 すずむし Vol.1, No.6, P2 (1951)
17. 鶴形山のカタツムリ すずむし Vol.1, No.6, P4 (1951)
18. 鶴形山のカタツムリ すずむし Vol.1, No.6, P4 (1951)
19. 甲虫類(カサバネ科), 半翅目(カサバネ科, セミ科), 白鳥形山の昆虫 (目録と解説) すずむし Vol.1, No.7, 別冊 P4-6, P6-8 (1951)
20. 金糸の *Limnitis* すずむし Vol.1, No.7, P1 (1951)

(8月7日記)

白神昭君をしのびて

廣瀬義躬

私が白神君を始めて知ったのはいつの頃だったであろうか。私が昆虫採集をはじめた1949年の夏だしが友人の菅野君と一緒に金沢天文台に行った時であらう。その時同じく始めて知った現在の小野、青野、友野の三氏に会って彼の黄色い顔がひどく印象的で今迄も私の目に残っている。あくれば1950年の春、陽光うららかに照り映え花々の初着の中に鶴形山の昆虫採集の時、鶴形山に小野悦次君と二人で採集を試みた。陽光のさんさんとふりそそ

ぐ中を私達はジヤコウアゲハやツマヤナコウ等の春の蝶を遊んでや、散れてトンネルの上の石段に腰をかけて休んでいた。ふと向うを見ると咲き盛ったフジの赤い花のかたまりの向うに白神居の顔が微笑してこちらを見てゐるのに気が付いた。私もそれに答えるかのように目で笑つてみせながら向うを覚えていてくれたのかとうれしく思つて近づいて行くと白神居も石段を一つづつ下りながら款々に近づいて来た。その時から一足有糸私と白神居との交際は始まった。

その同色と整った知識を私に與えてくれ何かと親切にしてくれる白神居の態度には有難く感謝していた。私達にも上人永たが誰から見ても感じの好い学生らしく家人も「いい人だ」とほめていた。それが7月31日の晩である。なにが彼をうらんだのであろうか！彼によって操縦された多くの虫共がうらんだのであろうか。それにしてもこれは腹に堪へない。おれはね、水死の際彼は戸一としてたてずだまつて死んでしまったという同行の斎野氏の言葉は款々に私に知識の毒をまたらすものである。前述に感傷の希望を口に託しつつ虫を友として春秋同好会のためにも本気で一歩熱心であつたらうと思ふその彼が急にぽつりと款々の前から姿を消してしまったということば款々のまわりに私にかね自が私来たような気がする。死の三四日前白神居は「今大仏から帰ったばかりだ、君の道徳山での採集品を見せてくれ」といつてうす暗くなりかけた頃私達をたづねて来た。私はその時少とく観心だかあと思つて私の道徳山での採集品を見ながら一時同好会談したがこれが腹に彼を見る最後であるとは予にも思ひなかつた。彼の死は昆虫のためにも



バックナレバー分譲

★すずむし

第5号 5.00 千 8.00

第6号 5.00 千 8.00

第7号 5.00 千 8.00

女第4号別冊

道徳山の昆虫 10.00 千 8.00

名号とも在庫若干あり。御希望のお方は至急御申込下さい。



飼育箱

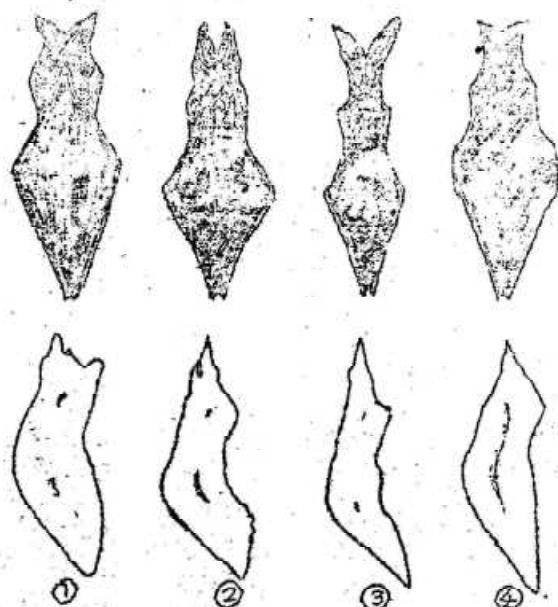
私の飼育箱には現在ヤママユ1、ウスタバギ1、キイロスズメ1、ギフタコウ4のそれぞれが羽化を

同好会のためにも惜しみあまりあるものであ
るがもし 蠶繭が不滅なものであるならば彼は
草葉の陰から款々の片鱗の働きを見守つてく
れるであらうことを信じる。深い悲しみと淋
しさに頂戴された款々であるが若くしてせか
なく散つた白神居の死を以て今後一歩
の努力を続けねばならぬ。白神居の死を惜し
むのあまりにたない文を綴り、思うことは充
分、いつくせぬが深い悲しみと淋しさの中に
、こゝにつづしんで哀悼の意を捧げる者であ
る。(1951.8.11)

肩ちねびていろ。(小野 祥)

● 皆さんの飼育箱の近況をお知らせ下さい ●

Pavilio 属普通種の蛹



① アゲハ 比較模式圖
② クロアゲハ 上 背面 下側面
③ オナガアゲハ
④ カラスアゲハ (小野 洋)

2-5 時間は續かないことが多かった。実に愉快で、大山の山の家でセウが居る
ことが出来なかつたほどであった。(小・野 三洋)

後集編

う、そのとり極序を破らし、類の
ハ、云と云ふ、眼の新、云々、と
して、是、二、時、の、修、修、是、り、と、
た、と、す、の、神、丹、丸、修、修、是、り、と、
き、こ、ら、諸、君、等、多、分、是、立、立、格、つ、破、す、
も、い、世、時、は、一、の、取、の、に、野、郎、七、子、
を、我、相、附、い、他、白、す、他、我、
秋、白、林、に、命、と、上、て、。 君、卿、た、い、い、
立、面、皆、罷、。 去、休、し、て、
に、曰、。 研、す、死、面、す、面、
て、母、子、に、は、の、た、き、然、す、
す、に、は、無、い、處、し、ど、し、
の、様、に、不、正、を、極、と、



自動車窓
から
昆虫採集

今年の6月22日のことである。隣にはまだ少し早いが甲虫が目的で大山に行くことに決めた。11時頃はや山川先生をはじめ青野君、白神君それぞれから車の4人は皆子犬大山寺行の日の丸バスにゆられていた。もう終業近くでヒヨウモンゴと無人でいる。ふと前を見ると處から白い大きなモウカ出て来た。白神君待ち切れなく戻つて遂に處からホットを振りはじめたらしい。驚くながれ数分後にもうイタモンゴを車に入れてしまつていた。

彼と昆虫の話をすると終リが
ないようだ。車頃はほとんど毎
日私の家に来ていたが、いつモ

すずむし 第1巻第8号

昭和26年8月15日 印一刷

昭和26年 8月15日 発行

編集者 小野 洋

友野良一

印刷 小野 洋

施行所 倉敷市新川町

倉敷昆虫同好会

非売品